

国会議事堂

現在の国会議事堂は 1936 年(昭和 11 年)11 月 7 日に竣工したが、その建設計画は明治期にまで遡る。1881 年(明治 14 年)10 月 12 日、明治天皇から国会開設の詔が発せられ、1890 年(明治 23 年)を期して「國會」(議会)を開く事が表明された。そして 1885 年、(明治 18 年)に内閣制度が発足すると議事堂建設の取り組みが始まった(初代:第 1 次伊藤内閣)。麴町区内幸町二丁目(現・千代田区霞が関一丁目、現在の経済産業省敷地)に仮議事堂が建設された^[1]。ドイツ人建築家アドルフ・ステヒミュラーおよび臨時建築局技師吉井茂則の設計による第一次仮議事堂は、第 1 回帝国議会召集前日の 1890 年(明治 23 年)11 月 24 日に竣工し、11 月 29 日に貴族院議場で明治天皇の臨席の下で開院式が行われ、第 1 回帝国議会が開会された。[漏電](#)により出火^[2]、仮議事堂は全焼した。このため貴族院議場を華族会館(旧鹿鳴館)、後に帝国ホテルへ移し、衆議院議場を東京女学館(旧工部大学校)へ移して会期を終了した。その後、吉井とドイツ人建築家オスカー・ルーチツェの設計による第二次仮議事堂が 4 月 28 日に着工。昼夜兼行の作業で第一次仮議事堂の跡地に再建され、同年 10 月 30 日に竣工した(第 2 回帝国議会は 11 月 21 日召集)。

1894 年(明治 27 年)8 月には日清戦争が勃発、大本營が広島県に移されると、広島臨時仮議事堂が約半月の突貫工事で広島に建設され、同年 10 月 14 日竣工、翌 10 月 15 日に召集された第 7 回帝国議会で使用された。**東京都(東京府)以外で帝国議会(国会)が開会された唯一の事例である。**幾多の苦難を経て、新議事堂が広田弘毅内閣総理大臣(広田内閣)、富田幸次郎衆議院議長、近衛文麿貴族院議長など約 2800 人の来賓を迎えて竣工式を迎えたのは、着工から実に 17 年を経た 1936 年(昭和 11 年)11 月 7 日のことだった。

国会議事堂は鉄骨鉄筋コンクリート造り。中央塔を除く大部分が地上 3 階建て、中央塔が 4 階建てで、塔屋最上部まで含めれば 9 階建てである。また、線対称の建物である。

長さ 27 - 35 尺(約 8.1 - 約 10.6m)、直径 17 インチ(43.18cm)のコンクリート杭を中央塔の下に 568 本、その他の部分に 3738 本打ち込み、その上に厚さ 1m(中央塔は 3m)の鉄筋コンクリート礎盤を置いて柱を支えている。

敷地はほぼ長方形で、前方部は広く庭園や車寄せに取られており、衆議院側・参議院側それぞれの後方部には事務局や委員会室などが入居している別館と分館が設置されている。竣工当時は西側を底辺とする三角形の敷地で、1960 年代に現在の大きさに拡張されている(→画像:完成当時の国会議事堂)。

外装は 3 種類の花崗岩を使った石積みで、内装には 33 種類の大大理石、2 種類の蛇紋岩をはじめ、沖縄県宮古島産珊瑚石灰岩(貝を含む巨石、トラバーチン)、橄欖岩、黒髪石、尾立石、日華石などが使用されており、こうした石材は日本全国から取り寄せられた。特に外装に多く使われたのが広島県倉橋島の桜御影と呼ばれる桜色をした御影石で、議事堂に使用されたことから「議院石」という呼び名もつけられている。また、天皇の休憩室には静岡県島田市産の紅葉石が使用されている。

このように建築材料や設備の素材のうち、郵便ポスト、ドアノブの鍵(マスターキー)、ステンドグラスを除き、すべて純国産品を使用して造られた新議事堂の総工費は、完成当時の金額で 2573 万 5977 円にのぼり、工事従事者は延べ 254 万人に達した。ちなみにアメリカ合衆国カトラー社製の郵便ポスト(郵便投函筒)は各階の廊下などにあり、地下の集配所に貯まるようになっている。かつては東京中央郵便局が、現在は銀座郵便局が集配に来る。また、途中で郵便物がつかえてしまった場合は、中にワイヤーが通してあり、それを下から揺することで落として集配する。



国会議事堂 食堂のお弁当